

# 「は／が」と助詞選択の位相 — 「文内主題」による「語り」と時間性 —

中川 正弘

## 0. はじめに

「は／が」と助詞選択の零度(1996年)<sup>1</sup>では、これら二つの助詞の定義、説明に現在使われている「主語／主題」という概念ペア、またこれとパラレルなどんな概念ペアも二者択一の実効性のある選択基準となりえないことについて論じた。それは、文を作るために組み合わせる語彙(名詞・形容詞・動詞・副詞など)を決め、「文」を組み立てると、日本人は無条件で「は」を標準として選ぶという動かしがたい事実を考えてのことだった。二つの選択肢のそれぞれに定義・用法が与えられていると、一見「二者択一」と見える。しかし、実際はそうならない。どちらを選べばいいかわからない状況、また、どちらでも「主體的」に選択する自由があると考える可能性が出てくる。

「は／が」をめぐるこれまでの議論では、正しい日本語文が例として示されれば、どの定義、用法も「正しい」と感じられる。しかし、そのような説明をさまざまな機会に繰り返し受けてきたはずの日本語上級レベルの外国人が日本人と同じ選び方ができず、これがいつまでも課題となっている。

選択が、見かけ上ではなく、実際単純に選べる「二者択一」となれるのは、デジタルな選択肢「0／1」のようにただ一つの定義・基準の上に立てられた場合だけだ。二つの項それぞれに自立的な定義があると、そのような対立とはならない。「主語(主格)」と「主題」は相互に排除し合うことはなく両立可能な概念だ<sup>2</sup>。

その後、このような認識に基づき、初級日本語の授業でも上級日本語の授業でも有効な扱い方を模索し、試みてきたのだが、そうする中で従来考慮されていなかったポイントが見えてきた。本稿ではそれらを確認しつつ、この問題を捉え直してみたい。

## 1. 「主語」の選択軸

「は-主題」は「が-主語(主格)」とばかり比べられがちだが、それでは「は」の使用の

---

<sup>1</sup> 中川正弘、「は／が」と助詞選択の零度、『広島大学留学生日本語教育』第8号、1996年

<sup>2</sup> 「主題化(提題化／取り立て)」という概念は「主語」に限らずどんな文の要素も「主題」となれる、あるいはすることができることを考えて使うのだろうが、「主語→(主題化)→主題」という文体操作は可能ではあるが、必ず行われるものではない。逆方向の「主題→(格選択)→主語」がプロセスとしては標準的だ。

全体象が見えなくなる<sup>3</sup>。まず、「が-主語」がどんなものかを確認しておこう。文法の「格(case)」についてはさまざまな分類、分け方があるようだが、どんな分類だろうと基幹となる「が-に-を-から」、中でも「原因 → 結果」や重力場における「上 → 下」のように、一本の矢印「→」によってシンボライズされる両端の2つの点、またその矢印のライン上を移動する第三の点の力学に重なる「が-に(主格-与格)」「が-を(主格-対格)」の対立を理解できない者はまずいないだろう。さまざまな「格助詞の誤用」の実例を見ても、そのほとんどがこれらの助詞の格機能を理解していないために生じたのではなく、これらと組み合わされる動詞の語義が学習者の母語、あるいは媒介言語となる英語と日本語で違うために生じていることが分かる<sup>4</sup>。

1-E) I ride the bicycle.	【対格 ○】		
1-J) 私は自転車に乗る。	【与格 ○】	>> 私は自転車を乗る。	【対格 ×】
2-E) I aim at a target.	【与格 ○】		
2-J) 私は標的を狙う。	【対格 ○】	>> 私は標的に狙う。	【与格 ×】
3-E) I like manga.	【対格 ○】		
3-J) 私はマンガが好きだ。	【主格 ○】	>> 私はマンガを好きだ。	【対格 ×】
4-E) I graduate from university.	【奪格 ○】		
4-J) 私は大学を卒業する。	【対格 ○】	>> 私は大学から卒業する。	【奪格 ×】

これらの誤用例を見ると、助詞「を・に・を・から」が間違っていると普通は扱う。しかし、英語話者が日本語で表そうとした「英語の内容」を考えれば、助詞の選び方は正しく、選ばれた動詞のほうが間違っていると考えることができる。動詞に「運転する/走らせる (ride)」「狙いをつける (aim)」「好んでいる (like)」「卒業して出る (graduate)」くらいを選んでいけば「を・に・を・から」で正しいからだ。

「主語(主格)」が項目の一つとなる選択はこれらの格助詞のものであり、この選択軸に「主題」は並びようがない。

<sup>3</sup> 三上章以来、「主語」ではなく「主格」を使うべき、あるいは「日本語には主語がない」と説明されもするが、「subject / object」の二つだけなら、分類の立て方がいくつもある「格システム：subjectif(主格) / genitif(属格) / datif(与格) / objectif(対格) / abratif(奪格) / …」と比べても、問題が生じるほどの違いはない。「格」の分類の中でもゆるぎのない基幹となるものであり、日本語にも対応する普遍性がある。

<sup>4</sup> 一般的な言い方にならない「語義が英語と日本語で違う」と書いたが、「複数の行為からなるプロセス全体を代表する部分の選択が違う」と言うほうが正確だ。日本語では「に乗る→を操る」を全体とする行為を「前半(始まり)」で代表することが多いのに対し、これに相当する英語「ride(自)→ride(他)」ではプロセス全体を後半で代表することが多いだけで、実際に意味し、理解される全体はどちらも変わらない。【提喻(synecdoche)：部分で全体を表す】

<sup>5</sup> 中川正弘、文法におけるパラディグムの諸相、『広島大学留学生センター紀要』第1号、1991年

## 2. 「主題」と「文内主題」

「は」は「主語」ではなく、「主題(トピック、テーマ)」を示すと言われれば、特殊な概念でもないため、すぐ理解もでき、説明にも得心がいく。日本語に限らずどんな言語でも、何かについて語るのであれば、そこに「主題」と呼べるものが必ずあるからだ。それなら、日本語も英語も変わらないのかというと、そうではない。

日本語でも英語でも「主題」としてまずイメージするのは文章の前に「題目(タイトル)」として置かれている言葉だろう。あるいは文章中に使われているたくさんの言葉の中で全体の内容を集約しているような言葉、あるいは文章中のどこにも直接言葉として表されていないが、その文章全体が指し示す言葉だ。だから、「主題」を解釈させる問題が長文読解の問題として使われる。また、レポートでもエッセーでも、文章を書くなら、「主題」をまず決め、それをどんな言葉、どんな構成で表そうかと考える。要するに、「主題」は普通「文」とはべつに存在する。英語ではそのようなものを「文」の内部で示そうとはしない。ところが、日本語では「主題」を「文」の外だけでなく、「文」の内部でも使う。それも標準と言えるほど多用する。そこに違いがある。文章全体の「主題」、章の「主題」、段落の「主題」、そして日本語では文の「主題」まで、つまり「マクロ主題>・・・>ミクロ主題」のように、一つの「主題」は他を排除しながら、階層的、複合的に独自の選択軸を形成する。このようなものを「格」と並べ、「二者択一」と扱うのは合理的ではない。

1996年の論考では、「例えば、『私／先週／京都／行きました』という語彙を用いて文を作るように言われれば、ほとんどの日本人は『私』に付ける助詞として『は』を選ぶだろう。そして、それは『は／が』の説明に持ち出されるさまざまな観念などまったく関わらない、完全に無条件の選択だろう」と書いたが、その「無条件の選択」はこれら二つの助詞の間で行われるのではなく、二つの位相で別に行われている。「主語(主格)」の選択はやはり「間接目的語・直接目的語(与格・対格)」との間で行われるものであり、「主題」は「複数の候補の中から選ぶ >> 明示する／明示しない」という選択だ。これらの選択はまったく質が異なる。

## 3. 「主題」の選択軸

言うまでもなく、「文法」は「文」という単位のあることが前提となっている。しかし、英語では考える必要などない「文という単位」が日本語では確定しにくいことについて以前(2007年<sup>6</sup>)論じた。

一般的に「は／が」の考察には英語に翻訳可能な日本語文、あるいは英語の標準文を翻

---

<sup>6</sup> 中川正弘、日本語における「ねじれ」の感覚と文の単位性、『広島大学留学生教育』第11号、2007年

訳した日本語文が使われている。そして、一見「文内主題」が「主語」と選択的な関係にあると見えるため、「主題は文の始めに一つだけある」と考える。しかし、その「文」と扱える言葉の連続の外、前にも後にも広がる文章全体、そして文章の背後も俯瞰し、「マクロ主題>…>マイクロ主題」のように階層化する「主題」のあり方、一般的な「文の外の主題」と日本語固有の「文の中の主題」を合わせて視野に入れると、「主題の選択性」が実際どこにあるかが見えてくる。

「主語(主格)」は「文」の内部で、その中心に据えられた動詞との関係によって決まるが、「主題」はそうではない。一般的な「文章の主題」は文章が始まるより前に選ばれているものだが、「文内の主題」についてもそれは変わらない。始まる前に決まっているものだ。どんな言説でも「主題」の選択はその言説に先行して行われる。日本語の「文」の中で「主語」以上にこれ見よがしに表示する「主題」は一見その位置で選ばれているように見えてはいても、実際はその「文」より前にあるものとの関係によって決められる。直前の「文」と同じ「主題」にすることもできるし、それではなく他の「主題」を選ぶことも可能だったはずだ。「~~が~~-新情報/~~は~~-旧情報」という説明は「事後説明」としては有効でも、選択基準として役に立たない。とはいえ、「文内主題」がその文の内部で選ばれるのではなく、前文との関係によって選ばれるものであることを間接的に示している<sup>7</sup>。

また、「主語」が直後の動詞にしか掛からないのに対して、「主題」は「息が長く、文の終わりまで掛かる」とよく説明される。しかし、それは正確ではない。文の外を含め、文章全体で見れば、「主題」は、その次の文、さらにその次の文にまでも掛かる可能性があるからだ。それはどこまで続くのか。「文」の終わりまでではなく、次の「主題」に交替し、その「文」が始まるまでと言うべきだろう。

- A) 今日は、わたしは、昼食は、ソバはあまり食べたくはありません。
- B) 今日、わたしは昼食にソバをあまり食べたくありません。

A)のように、一語の「主題」をいくつも繋ぐことも不可能ではない。このような語り口はB)の標準的(フォーマル)な構成と比べると、「話者は今考えながら話している(=文の内容を考えてしまった後、文としてきれいに整えたものではない)」と感じさせる。

「主題」という名称は「主」と付けられているため、「主語」と同様、「主要 → 重要」な要素であると感じさせる。しかし、論文やエッセーの「題名-本文」の組み合わせにおいて重要なのは「題目」ではなく、「本文」のほうであるのと同じように、文内においても

---

<sup>7</sup> 「~~が~~-新情報/~~は~~-旧情報」という定義では二者択一で選べないことについては既に(1986年)論じた。どうして「新/旧」というポイントに注目するか、この選択に先立つ選択が必要になる。また、実際は「新しい」とも「古い」とも判定できないことが多いからだ。





## 5. 「文」の提示とアクション

一般的に「文」の構造は格の組み合わせに限らず論理関係全体が平面分布的で静的なものイメージされ、扱われる。前後を入れ替える「倒置」は「場所」ではなく「時間」の効果なのだが、そう認識されることはまずなく、文法において考えられる「時間」は内容となる出来事・行為の位置づけの仕方である「時制」くらいだ。

しかし、言語と時間との関わりがそれだけになっているわけではない。「文」という単位から「文章」に目を移し、全体を俯瞰すれば、日本語でも英語でも文の配列の仕方、展開の速度は「文章」、特に自然な時間の展開を模倣する「語り」において重要なファクターとなっている。

音声言語は本来「音楽」と同じように時間のルールに従っていたはずだが、それがアルファベットなど表音文字で表記する段階に入ると、視覚化されたことによって「時間の溯行」、「同時認識」が可能となり、平面分布的に扱うようになったのだろう。

- A) Xが買ったマンガは『アキラ』だ。  
The manga (that) X bought yesterday is “AKIRA”.
- B) Xは昨日マンガを買った。                      そのマンガは『アキラ』だ。  
X bought a manga yesterday.                      It(the manga) is “AKIRA”.

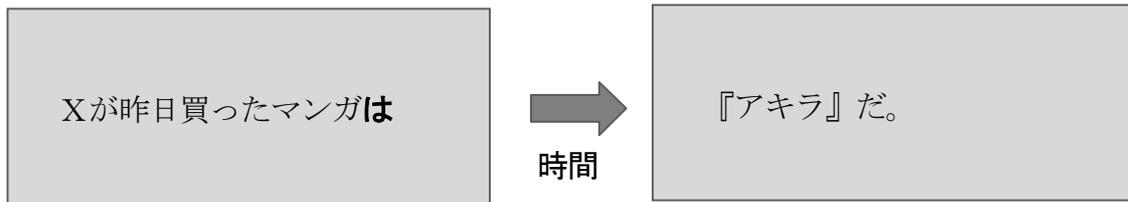
A)は複文だが「一つの文」になっている。B)の二つはA)を分けてできた単文だ。英語はこれ以上分ければ「単語」になってしまう。しかし、日本語は「主題」と「述部メッセージ」に分けることができる。

PowerPoint などを使ったプレゼンテーションでは、「トピック+メッセージ」を1枚のカード(スライド)で一気に見せることもあるが、伝達効果を考え、まず「トピック」だけを1枚のカードで見せ、次のカードで「メッセージ」を見せることがよくある。これは人間の知覚認識のプロセスを考慮したコミュニケーション・テクニックだ。

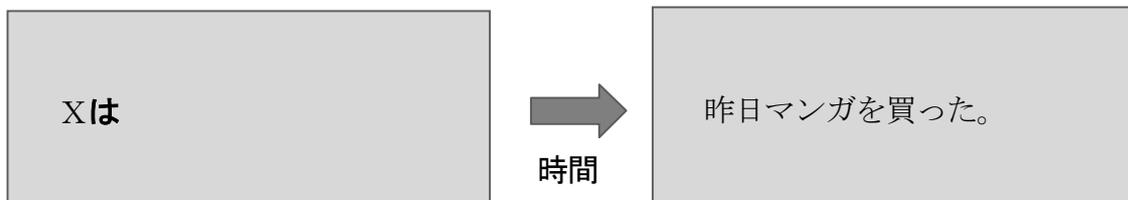
### 1 card

Xが昨日マンガを買った。
--------------

## 2 cards



## 2 cards



文法には時間を排除した論理構造の側面だけでなく、時間を基盤とする認識プロセスの側面があることを確認してみると、「主部+述部」という現在使われることはまずなくなった日本語文法の構造概念が後者を反映した、固有の形式のようにも思えてくる<sup>8</sup>。

## 6. 「文内主題」を使う文体

<sup>8</sup> 三上章は日本語文法の「論理」を突き詰めたと言えるが、論理を駆使するその考察の「純化」は、自然な認識プロセスに含まれている「時間」、「語り」の要素を排除してしまった。

日本語：公園には人が多い。 【場所→対象→数量】  
英語：There are many people in the park. 【数量+対象+場所】

日本語と英語の語順は助詞と前置詞に限らず基本的に「前後逆」になっている。文法の「客観的記述」はその事実を指摘するだけで止めているが、「語順」を人間の自然な認識プロセスと比べると分かることがある。英語話者が使う文法は日本語と正反対でも、言行為に先立って意識内で自然に行われる認識プロセスは日本語と変わらない。

認識プロセス：park > people > many 【場所→対象→数量】

すると、英語文法の語順は「自然な認識と逆」ということになるのだが、これは下に示すように西洋言語に共通の「論理化」と考えることができる。

自然な認識と逆＝自然な認識（正方向）＋確認（逆方向）  
→ 認識の論理的再構成

西洋言語を特徴付ける「論理性」は「文」という言語単位において「時間（認識プロセス）」を排除することによってなされたと言える。ただし、自然な展開は「物語り」のナラトロジーには残されている。二つの相反する原理の統合には大きなメリットがあったようだが、日本語文法がその中に置き続けている「語り」「時間」はこのパースペクティブで見極めなければならない。

「主題(トピック/テーマ)」という概念は従来、自明のものであり、この言葉さえ使えば、助詞「は」の定義、説明は完了するかのよう扱い方がされてきた。だが、「文章の主題」と「文の主題」は同じではないこと、また前者はどんな言語でも使われるものだが、後者は違い、こんなものを使っているのは日本語くらいであること、従って、問題のポイントは「は」を定義する概念の如何にあるのではなく、一般的には「文章」のものである「主題」が「文」の内部で使われていることにあるとまず確認した。

そして、「文章」はただ「文」がいくつも連なったものなのではなく、英語など多くの言語では「文章-時間的展開」「文-非時間的論理」という二つの対立する原理を組み合わせていること、それに対して、日本語は「文」と「文章」をあまり区別せず、どちらも同じ「時間的展開」を原理としていることについて考察した。

ここでそれらの考察を背景に、「主題」を文内で使う日本語はどのような文体になっているかを検討する。「主題」を文内で使うことでどのような言語効果が得られているだろうか。

#### \* 速度感と長文化

「主語」ではなく「主題」を使う、これは4で見たように、一かたまりで示せなくないものを二つに分けて提示することを意味するのだから、それによりまず生じるのはコミュニケーションの「スローダウン」だ。これだけでは効果としてプラスともマイナスとも言えない。望ましくない「遅延」の原因、つまり単純にマイナスと感じられるケースもあるだろうが、「分かりやすくなる/考える時間が持てる」ことでもあり、望まれるケースも少なくない。「速い/遅い」のどちらのモードにしているか、これを明示できる形式なのだから、基本的にはプラスと考えていいだろう。このような形式を持たない英語では、話す場合は音声を変化させ、制御することができるが、それを文字で表記することはできない。

一方、次に示すように、「一文限り」ではなく、文章中で「同じ主語」の文がいくつも連なる場合を考えれば、見え方が違ってくる。外国人向けの日本語文法ではなく、日本人向けの国語文法で「は」は「息が長い係り助詞」と説明されるのだが、一度示せば、後に続くいくつもの「文」が論理的に共通の「主語」を持つ場合、それらを略すことになるのだから、「スローダウン」ではなく、逆に「スピードアップ」ができると言える。

**a が X。 a が y。 a が Z。 → a は x、 y、 z。**

この書き換えは数学の因数分解に似ている。長い文を好む日本語<sup>9</sup>にとって、文を長く繋

<sup>9</sup> 前掲：中川正弘、日本語における「ねじれ」の感覚と文の単位性、2007年。

中川正弘、日本語における動詞連鎖構造と時間のビジョン、『広島大学留学生教育』第14号、2010年。

ぐために必要な「簡略化」の効果が得られると見ていいのだろう。

$$ax+ay+az = a(x+y+z)$$

「主語」が交替しないで同じ「主語」の文がいくつも続く、これは英語では歓迎しない。そのような単調さは好まれない。西洋の小説は「神のように遍在する非人称の語り手+三人称の登場人物」の形式を標準とするが、それは複数、あるいは多数の人間を等距離に見る「客観性」をよしとするからだ。一方、日本の小説は非人称も使わないではないが、一人称の語り手が語る「私小説」が典型となっている。この形式をとると、視点が限定されるため「わたし」であれ「対象となる人物」であれ、同じ主語の文が連なる可能性が高くなる。

英語： I **give** you. → You **give** me.

日本語： (私は)あげる。→ (私は)もらう。

このように英語は**同じ動詞**を繰り返すことでその行為が客観的となる文の繋ぎ方を選びやすく、日本語は**同じ主語**を繰り返すことで主観性が強く出る繋ぎ方を選びやすい。

#### \* 重要度バランス

「主題」は「主」と付いているためどうしても「重要」と感じるが、「主語(主格)」との質の違いから「重要ではない」と感じさせる使い方ができる。

- 0) Xさん／これ／書きました。
- A) Xさん**は**これを書きました。
- B) Xさん**が**これを書きました。
- C) これを書いた人**は**Xさんです。

既に述べたように、文脈となる条件が何もない状態で**0)**の言葉を使って「文」を作れと言われると、日本人は**A)**のように「**は**」を使おうとする(助詞選択の零度)。**B)**は「Xさん」が「**主語(主格)**」で、外国人が選ぶとするのはこれだ。**C)**は「Xさん」を強調する構文だが、違いが「**は／が**」しかない**A)**と**B)**のうち、**C)**と同じように「Xさん」が強調されていると受け取られる言い換えは**B)**のほうだ。それは**A)**の「Xさん」には強調が感じられないということを意味する。

---

文を動詞一つの単純な文で終わろうとせず、いくつもの動詞を連ね、長い文を作ろうとすることで日本語の「ねじれ文」が生じることについては既に論じたが、これには「主語」ではなく、「息の長い主題」を使うことも関わっている。

A)の「Xさん」に強調が感じられないのは「は-主題」が使われているためだ。先に述べたように、「文内主題」は論理構造としての「文」から半ば切り離され、時間的に前に置かれたようなものだ<sup>10</sup>。そのような「主題」と論理構造としての「文」に残された「述部メッセージ」とを比べると、後者が「重要」と感じられる。「文内主題」は注目度を低下させた「主語」と言えなくもない。

これを文字のサイズを変えてイメージ化すると次のようになる。

A') Xさんは これを書きました。 (1/2 → 2/2)

B') Xさんが これを書きました。 (1/1)

A')の「Xさん」はメッセージのボディから切り離して「主題」とすることができること自体によっても重要度が高くないと分かる。「主題」は表に出さなくても文脈から理解できることが多いため、省略されやすい。文が確定した後の事後説明としてはそれなりに納得のいく「は-旧情報／が-新情報」というペア概念は、重要な情報は旧情報である「主題」の後に来る「述部メッセージ」であることを間接的に示している。

論理構造であるB')の「Xさん」の重要度が高く感じられるのは「主語」だからではない。「主語／目的語(主格／対格)」の論理関係に軽重があるのではなく、日本語で標準となったA')との対照により、相対的に「重要度が高い」と感じられるだけだ。

このようなバランスは感覚的なもので、論理的とは言いがたい。だが、かな／カナと漢字を組み合わせる日本語の書法で、実際他の者にはうかがい知れない個人的な理由で文字のサイズを変えて書くことを自然と感じたり、前景／後景の「遠近感」を表現するかのように「漢字を大きく、かなを小さく書くと美しい」と感じたりする感性と共鳴しているのだろう<sup>11</sup>。

---

<sup>10</sup> 注2で「格」の決定している文の要素を「は」によって「主題化／提題化／取り立て」することは文体操作として可能だが、その逆、「主題→(格選択)→主語」がプロセスとして標準だと書いたが、「主題」はどんな「格」にするか未定のまま文章の「展開」に現れ、後に来るべき「述部メッセージ」を「宙づり」で使うことが少なくない。

<sup>11</sup> 西洋の個人のサインは頭文字のみ大きくし、他の文字は書き崩す。感覚的な個性の表現としては同じと言える。また、英語ではA and Bと並列の接続詞は一つしか必要とされないのに対し、日本語では「AとB／AやB／AとかB」の三種が使い分けられるところにも同様の感覚的コントロールを見ることができる。英語と同様の「論理性」しか要らない場合は「AとB」を、言及はしないが、これら以外のものも視野に入れている、つまり「距離」を感じる(感じさせる)場合には「AやB」を、その時、考えながらライブモードで「時間」を使い、ゆっくり提示する場合には「AとかB」を、と使い分けるが、これは話し手の気の赴くままとしか言えず、聞き手にとって客観的、論理的な情報の差はない。

## \* 「文」の可変フォーカス

繰り返すようだが、一般的にイメージされる「主題(トピック/テーマ)」は、文章の前に置かれるタイトルのように「文」の外に別にあるか、「文脈」に潜在する。日本語の「は」を使う「主題」はそれとは違い、文内に顕在させる主題、「文内主題」だ。英語に限らず、多くの言語では語彙のセットから一つの静的な「文」を組み上げるが、日本語は「文内主題」と「述部メッセージ」の二つのパートに分け、時間差を付けて提示する。内容によって分け方にはいくつか選択の可能性があるのだが、それにより何が違ってくるのか、文体上の効果を見てみよう。

「文内主題」は考えやすくするため、ここまで一語の例しか使わなかったが、「文」レベルの情報の分割においてサイズ、つまり語数の選べる場合がある。

- 0) ゾウの鼻\_\_長い。
- A) ゾウの鼻**が**長い。【あの子は、象の鼻**が**長いことを知らない。】
- B) ゾウの鼻**は** 長い。
- C) ゾウ**は** 鼻**が**長い。

0) では空白にしてあるが、ここに助詞を使わないのも一つのスタイルと見なせる。しかし、何もないとも言えない。日本人が声に出して読めば、ここで「間(時間)」を入れるか、「はな」の「な」の音を長くするだろう。

A) と B) はどちらも日本語の文法として正しい。しかし、真っ先に使おうとする標準構文とは言えないだろう。A) が「主語(主格)」を使う論理構造で、1枚のカードのように一まとまりになっているのに対し、B) のほうは「文内主題」と「述部メッセージ」の二つのパーツに分かれている。これが時間性を有する「語り方」であることを示すためにここでは「は」の後に「間」を入れておく。

C) は日本語でもっともよく使われる構文だが、この文の構造に対応する英語がないため、また二者択一の選び方が議論される「は/が」の両方が組み合わせられる文であるため外国人向けの日本語教育では避けがちになると同時に、日本語固有の文法として注目してきた構文だ。

「文内主題」と「述部メッセージ」は時間性を基礎とするナラティブな関係にあるが、「述部メッセージ」単独では時間性を含まない論理構造が標準であるため、「鼻**が**長い」と「主語(主格)」を使う。

B) と C) では「文内主題」の長さが違う、とまず言えるのだが、当然「文内主題」のあとに来る「述部メッセージ」のサイズはそれに反比例する。「述部メッセージ」は重要度の高い情報であるため、短ければ短いほど「焦点」が絞られたことになり、強調効果が大きくなる。

しかし、語数がもう少し多い下の例で比べた場合、読む者、聞く者にとって違いはほとんど意味がないと考えられる可能性が高い。他者の言葉に対してはそのような客観的な、つまり突き放した受け取り方をするものだ。しかし、書き手、話し手にとってはいくつか存在する可能な選択肢から選ぶとなると、どうしてもいづらか主体的にならざるを得ないため、主観的だが「焦点の当て方」を変えたと感じるはずだ<sup>12</sup>。

D) 日本の道の通行は 中国と左右逆だ。

E) 日本の道は 通行が中国と左右逆だ。

F) 日本は 道の通行が中国と左右逆だ。

これら三つの「文内主題」のとり方でもっとも頻度の高いのはF)ではないだろうか。一語のみの「主題」を「述部メッセージ」の前に置くことはひじょうに多く、習慣化していると言え、これが「零度」となりやすい。

#### \* 「節の主従性」の印象操作

英語には「主節／従属節」を組み合わせ、複雑で豊かな内容の論理構造を作ることが可能にする「関係代名詞」がある。だが、日本語にはそんな論理ツールがない。そのような論理構造の英語文を日本語に翻訳する場合、完全に対応できるわけではないが、「主語／主題」と「です・ます(丁寧体の外言)／だ・する(普通体の内言)」を節の主従関係を示す指標として使う。言説を「分割する／分割しない」によって不安定ながら自然な「距離感」「速度感」のような効果が生じることに言及したが、それらを使えば日本語には本来存在しない節の「主従性」が表せる。

「主語＋普通体」を使えば、従属節にふさわしい「時間を感じない論理構造」のように感じられる。そして、主節のほうには「主題＋丁寧体」を使い、「時間を感じる語り構造」にする。

Xは昨日マンガを買いました。

X bought a manga yesterday.

それは『アキラ』です。

It(the manga) is "AKIRA".

Xが昨日買ったマンガは『アキラ』です。

The manga (that) X bought yesterday is "AKIRA".

動詞(用言)を名詞(体言)に接続させる「連体形」は、一見この名称を与えられている「かたち」に接続機能があるかのように見える。しかし、他の活用形(終止形など)と共通の音

<sup>12</sup> 「多数派に従う」ことは「主体的」と言えないと考えるかもしれないが、基本姿勢には必ず「従う／従わない」という選択肢があるものだ。「客観性」も同様で、「客観的／主観的」のどちらを選ぶか、その基本姿勢の選択は「主観的／主体的」となる。

声を用いているのだから、その語形・音声形に固有の意味・機能が込められているとは言えない<sup>13</sup>。機能語彙を使わず(ゼロ記号で)直接接続する日本語は、音声化する場合、「助詞」「動詞形」以外に、文字で表記できない「上がり調子」も使って接続の「主従」を暗示する。

標準：I read the manga.

倒置：The manga I read is ….

標準：わたしはマンガを読みました。

倒置：わたしが読んだマンガは…。

が：論理／時間性（－）→ 短／速 → 小 → 遠 → 後景 → 従属節

は：語り／時間性（＋）→ 長／遅 → 大 → 近 → 前景 → 主節

英語と共通の接続記号は「倒置」くらいだ。「倒置」は固有の音も文字も持たないのだが、「標準配列と前後が逆」という「かたち(フォルム)」が質量ゼロの記号となっている。

## 7. おわりに

「文法」を論理構造に適した精緻なものに磨き上げた西洋言語は「文」という言語単位を明確にした。それは、文章中で「文」をその前後にある他の文と切り離し、自立した「島」とすることでもあった。一方、日本語は「文」という言語単位を前後から切り離そうとは考えなかったようだ。「文」の内部の自立的な論理構造を確立するより、前後の文とのつながりを大事にし、長い文章の一部にとどめようとしたのだろう。「…→ 前の主題 → 主題 → 次の主題 → …」のような連鎖を作り、変化しながら長く続く「語り」に適した文法、語法が多い。(了)

---

<sup>13</sup> 動詞の活用で変化する語末音はその動詞の意味を担っているとは見なせない。その後に来る、活用形のそれぞれの名称が示す論理要素への移行を不完全だがじゅうぶんに暗示するにとどまる。すると、実質的な意味のない「無用」な音と見えるが、このような暗示要素を使うことで必須の論理要素を「隠す／伏せる」ことが可能になる。これは日本語のスキルにおいて重要な項目となっている。